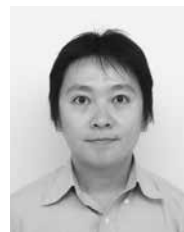


# 結核低まん延時代の患者発見対策

## 第21回国際結核セミナーより



千葉大学医学部附属病院

感染制御部・感染症内科

市村 康典

第21回国際結核セミナーは「結核低まん延時代の患者発見対策」をテーマに、3月3日新橋のヤクルトホールにおいて開催された。まず結核研究所の石川信克所長から、2020年までの低まん延化（人口10万人当たり10人以下）を目指し、国内で対策が進められているものの、新たな患者を早期に発見するための取り組みが必要であるとの挨拶が述べられた。

特別講演では、WHO（世界保健機関）本部医官のKnut Lonnoth氏が「結核制圧への方策—低まん延国の取り組み—」と題して、WHOが結核の根絶に向けて低まん延国に行っているアクションの枠組みについて示された。

WHOの掲げる結核根絶戦略は、既存の医療技術・公衆衛生システム・負担軽減システムを最大限に活用することで低まん延化をまず達成し、その後、新たな調査手法や治療・診断を導入することで根絶（人口100万人当たり1人以下）を目標とするものである。今回示された新たな枠組みは、この戦略と整合性を持ち、2015年から35年の間に各低まん延国は結核罹患率等を90%減少することを目標としており、現在低まん延化を達成した国だけではなく今後達成する国も対象とされる。

低まん延国では、特定の高危険グループ（国毎で異なる）における結核患者の集中が認められる。サーベイランス及び研究により高危険グループを抽出し、スクリーニングの実施・適切な医療の提供・背景となる社会的因子への対処などが優先課題となる。

特別講演の最後に、世界レベルでの結核の根絶を

目指すには、一カ国での対策では難しく、二国間および多国間での協力と技術支援を行うことが必要であると、Knut氏が強調されていたのが印象的であった。今回紹介された枠組みは、WHOのサイトからダウンロード可能であり、今後の日本の対策を考えるうえでも参考になると思われる。

次の「患者発見のあり方—2020年の低まん延化に向けて—」と題したシンポジウムでは、「ハイリスク健診／接触者健診」（大阪市保健所松本健二医師）、「低まん延地域における患者発見」（山形県置賜保健所山田敬子医師）、「外国人留学生の結核」（結核研究所太田正樹医師）、「入国者健診の実際」（結核研究所河津里沙研究員）がシンポジストとして登壇され、東京都医学総合研究所理事長並びに太田正樹医師を座長に、フロアからの質疑応答も交え、非常に活発な議論が広げられた。この中で取り上げられた、国内における高齢者・外国出生者をはじめとするハイリスクグループへの取り組み、適切な接触者健診の実施は、Knut氏の特別講演でも示された内容であり、その重要性をあらためて感じた。

今回のセミナーでは、国内結核対策を進めていく上での患者発見における具体的課題を認識するとともに、世界レベルでの対策の協力についても考える機会となった。

### シンポジストの方々



松本健二医師



山田敬子医師



太田正樹医師



河津里沙研究員



特別講演 WHO本部医官Knut Lonnoth氏